

第12回「日本語大賞」

テーマ「私を動かした言葉」

高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

「込められた思い」

東京都

東京都立三鷹中等教育学校

四年 武田 悠世

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

「込められた思い」

東京都立三鷹中等教育学校 四年
武田 悠世（たけだ・ゆうせい）

「地獄は、あの世ではなくこの世にある」

これは、私が小学生の時に、既に九十歳を越えていた曾祖母が口にした言葉である。曾祖母が若かった頃、日本は戦時中であった。当時、静岡市内に住んでいた曾祖母は、空襲に遭い、市内に火災が広がる中、二人の幼い子供の手をひいて必死で逃げ回った。その時に通りかかった橋のたもとから、ふと川を見下ろした時の恐ろしい光景が、目に焼き付いて離れないという。川の中には性別すらわからない数多くの死体が、折り重なっていた。中には、こちらに顔を向けているものもあった。その虚ろな目と、偶然にも目が合った時、「地獄は、あの世ではなくこの世にあると感じた」と曾祖母は語った。

日頃から口数が少なく、我慢強い曾祖母であったが、戦時中の体験について話すのを聞いたのは、後にも先にもこれ一度きりである。だからこそ、この言葉はある種の重みを持って、私の心に刻み込まれた。戦後数十年が経ち、世の中の様子がどんなに変わろうとも、拭い去ることのできない鮮明な記憶。曾祖母は当時のことを淡々と語ったが、曾祖母の人生の中で、心の奥底に押し込められてきたその思いは、どれほどのものであったのか、私には計り知れない。

日々の生活の中で、私が戦争について意識する機会は少ない。テレビやインターネットから世界中で起きている民族紛争や地域紛争などの情報を得て、その背景を知り、現地の様子などを映像で確認することはできる。しかし、そのようにして得た知識から、戦争や紛争が人々にもたらしてきたものが何であるのか、その本質を心で理解することは難しい。そうした意味で、実際に体験した者の目線で語る曾祖母の話は、真実味を持って私の心に響いた。そして、曾祖母が感情を交えず、冷静に話せば話すほど、長い時間をかけて昇華させてきた苦しみや悲しみの大きさが、より伝わってくるように感じた。曾祖母は、もしかしたらその体験を思い出したいとも、人に話したいとも思っていなかったかもしれない。むしろ触れずに、心の奥底にそっとしまっておきたのかもしれない。しかし、戦争が一人一人にどれほどの忘れられない傷跡を残したのか、そして、平和であることがどれほど尊いことであるのかを、これからを生きる私たちの世代へと伝えるために、使命感を持って話してくれたのではないだろうか。

人から人へと向けられた言葉には、その言葉の持つ本来の意味以上の、発した人の思いが込められている。そのメッセージをどう受け取るかは、受け取り手次第である。曾祖母が実際にどのような思いで、まだ小学生である私に戦時中の話をしてくれたのか、亡くなってしまった今となっては確かめようもない。しかし、曾祖母が言葉を通じて、私に向けて発したであろうメッセージを、私は確かに受け取ることができたと思う。毎年夏が来て、ニュースで平和記念式典の映像が流れる度に、私は曾祖母の言葉を思い出す。そして、平和への願いを新たにする。曾祖母の言葉は、それに込められた真実の重み、伝えようとする勇氣、そして、受け取る側の真摯に向き合う覚悟について考えさせられる、私の心を動かす一言であり続ける。